

倉敷通信

紀元 2600 年を祝福する瑞兆と喜ばれた西空の五大遊星観望會が2月22日に當地で催された。この日は大變寒くて、風が強く吹き、おまけに雪さへまじへた天候で、遊星の観望もどうかと思はれたが、陽の沈む頃から風もなご、雲も切れて、定刻18時頃にはもう熱心な人々も集まつて、滅多に見る事の出来ない水星を薄明の空に求めて、7センチ150倍の望遠鏡で小さい半月の形をしたこの太陽に最も近い星を楽しんだ。そして或る人々は、山本先生指導のもとに、この珍しい五遊星の會合をカメラにおさめた。段々と暗さが増すにつれて、空のコンディションも良くなつて行つたので、32種のドームを開けて、これ等の観望にうつつた。“めつたに見られぬ星だから”と云つたつて、視直径も小さいし、おまけに地平線近いものだから、その形さへ餘りはつきり見えないものだから普通一般の人々には、水星は餘り深い感銘も與へる事は出来なかつた。何んと云つても、人氣の中心は土星であつた。鏡裡にうつるその神秘的な奇觀には感謝の聲を誰れしも放たないものはなかつた。まだまだあれもこれも心行くばかり星を見たがつたが、時間もさしせまつたので、20時少し過ぎから農研講堂に山本先生の“遊星の世界”といふ興味ある講演が行はれた。集まるもの5—60名、皆熱心に山本先生のお話をきき、或る者は手帳に控へ、講演が終つて後、質疑應答があつて、頗るなごやかな和氣に満ちた観望と講演會が22時頃終つた。まことに皇紀2600年を壽ぎ祝ふのにふさはしい日だつた。

自分もこの水星にお目にかゝるのも何度目かで、この日より前から或は後にも何度となく薄明の空にこの星を望遠鏡裡にのぞいたが、とてもアントニアチ氏のような水星の観測は出来相にも思はれず、その形状を楽しむだけだつた。誰か、この星を研究して見様と云ふ人はありませんか？(3—1)

編輯室より

来る十月1日の日食を觀測に10人のメンバを本會から送るためには、旅費と諸器械、寫眞フィルムや乾板其の他の費用が全部で5萬圓は入要なのです。山本會長始め、會の主腦部は此の費用と優秀なメンバを得るために奔走中です。此の際に當り、いち早く矢野彰英氏から特志寄附金を頂いたことを感謝します。どうぞ他の會員たちも、此の遠征計畫をよその事と思はず、國家の學術の發揚のため御聲援を願ひます。

天文カレンダは好評です。御希望の方は成るべく早く御申込み下さい。

(本誌226號119頁參照)